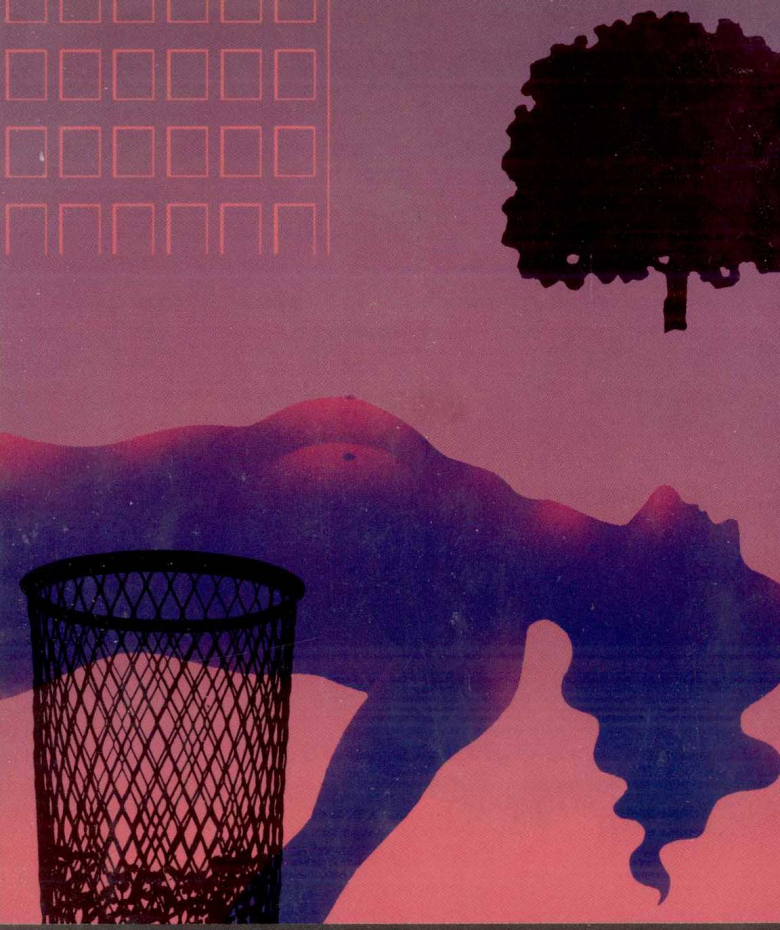


KAPPA NOVELS

連作推理小説

継続捜査官

島田一男

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

連作推理小説　**継続捜査官**

昭和53年3月25日　初版1刷発行

著者　島田一男（しまだかずお）
東京都新宿区余丁町4

発行者　小保方宇三郎

印刷者　鈴木貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替　東京6-115347
株式会社　光文社
電話　東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（榎本製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Kazuo Simada 1978
(分)0-2-93(製)02340(出)2271(0)
Printed in Japan

連作推理小説

カッパ・ノベルス

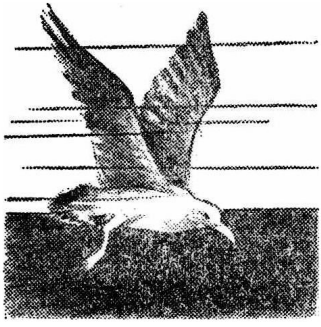
『継続捜査官』目次

誇り高き魔女 5
熊ン蜂の巣 33
真昼の星座 63
猟人の森 107
枯れ葉の中に 135
暗い十字路 163
全裸死体の素顔 189
乾いた指 217
あとがき 240

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

本文・扉イラストレーション／小松（こまつ）　久子（ひさこ）

誇り高き魔女



1

警視庁旧館の五階はいつでも静かだ。

ここには庁内機関誌の編集部、警視庁史の資料室、防犯協会や警察友の会の事務室が並んでおり、そんな部屋へ出入りするのは、ドアも静かに開けたてし、廊下も足音を立てずに歩く老人が多い。その殆どが、退職した警察官が嘱託や事務員として働いているのである。

迷宮捜査班——事件記者たちからそう呼ばれている捜査一課の継続捜査班の部屋が、こんなもの静かな旧館五階の一劃にあった。

班長の湯浅警部は、部屋のドアをあけたとたん、スーッと流れて来る線香の匂いを嗅いだ。

——みんなも気にしてるんだなア……。

湯浅警部の口もとに、ちょいとホロ苦い笑いが浮かんだ。

いま継続捜査班に廻されている事件は、目黒区自由が丘のマンションで起こった人妻殺し、品川の臨海プラザ・ホテルの女医殺し、百人町の女子高校生殺しの三件。いずれも事件発生後一年半以上たっており、所轄署に置かれた捜査本部から継続捜査班へ移されたものであった。

——事件は絶対に迷宮入りにはしない。徹底した科学捜査と少数精鋭主義で、どこまでも真犯人を追いかける……。

これが継続捜査班を置いた目的なのだ。

しかし、捜査本部があれば三十人から五十人の刑事が専従員として事件を追いかけるが、継続捜査となると、本部員の中から選ばれた四人の刑事で担当しなければならない。

十倍の人員で摑めなかった犯人のウロコを四人で追いかける。継続捜査班員の仕事は地味で根気がいる。そのうえ——

——本当なら迷宮入りで解散になるところを警察の面子で継続捜査ってわけ。早い話が選ばれた四人は姥捨て山入りだよな……。

そんな蔭口をささやかれると五階の部屋はとかく湿っぽくなる……。

「——なんの真似だい？」

部屋に入った湯浅警部がジロリと集まっている刑事達を見廻した。

「もう十一時を過ぎてるぜ。チョウさん達はここで、有

難てエ仏さまのおハナシでもしているつもりかい、線香なんか焚いて？」

継続捜査班に入る刑事は、殆ど全部が中年過ぎたベテランの部長刑事だった。

線香は、湯呑みに入れた灰の上に立てられ、青い煙かユラユラとのぼっていた。

「きょうは、自由が丘の被害者の命日なんですよ」

そういったのは、女医さん殺しを担当している村田部長だった。

「むごたらしく殺されて丸二年……。ほんの心ばかりの供養と思いましてねエ」

「それで仏が浮かばれるかなア？」

——えっ？……部長刑事達はムッとした表情で湯浅を見た。一つの殺しに四人だから十二人の部長刑事が集まっていた。学校出の湯浅よりはみんな年上だった。

「わかってますよ」

女子高生殺しの船津部長か吐き出すようにいった。

「犯人をあげなきゃ、仏は浮かばれねエ……。そういいたいんでしょう」

「だったら線香なんかくすべてるこたアねエだろう」

「だけどね、あたし達だって人の——」

「おっと！　その先はわかっている。——おれもやっぱり人の子だ。情に変わりはねエ……ってんだろ？　だけど船チョウさんは今年確か五十六だったな？」

船津部長が、ハッとしたように湯浅の顔を見詰めた。

「わかってくれるかい、船チョウさん？」

「済みません……。出かけます」

船津の言葉に、他のデカ長達が一斉にうなずいた。

警視庁の職員に定年はない。しかし、満五十七歳を迎える年の三月三十一日に退職するのが昔からの習慣になっている。その意味で、船津部長にはあと一年余りしか残されていない。

——チョウさんよウ、やめるまでに受け持ちの事件に目鼻をつけるよう頑張ってくれ……。

そんな湯浅の気持ちが、船津を始め他の部長刑事達にも通じたのであった。

「女医さん殺しの係は残ってくれ……」

出かけようとしていた十二人の刑事の中から村田部長を始め中原部長、守田部長、木下部長の四人が残った。

「おれは今朝、ここへ来る前に、科捜研へ寄って来たんだ」

湯浅が四人を見廻した。——科捜研とは科学捜査研究

所のことである。
「何か科捜研で調べて貰うようなネタが手に入りましたか？」
四人の中では一番若い木下部長がたずねた。
「いや。おれ自身の心理状態を、心理班の牧村女史に調べて貰ったのさ」
「よくわかりませんなア……」
「女医さん殺しのことは、牧村女史もよく知ってたよ。しかし、おれはおれなりに、この事件のことを、まず客観的に詳しく説明し、それから、事件に対するおれの考えを話して心理テストをして貰ったんだ」
「判断が正しいか、間違っているかをですか？」
「いくら科捜研のベテラン技官でも、――お前の考えのどこは正しい、どこは間違っている……とは断定できっこねエよ」
「じゃ、牧村さんはどういうんです？」
「それをいう前に、誰か女医さん殺しの顚末を説明し、それに対する今までの捜査経過を話してくれないか」
「科捜研で班長かやったことを、ここで繰り返してみようというのですか？」
――そういうわけだ……と湯浅がうなずいた。
「じゃ、あたしがやりましょう」
村田部長が、机の上に立ててある書類綴りの中から捜査日誌をとりあげた。
「一昨年の七月二十九日。この日は月曜日ですが、品川の臨海プラザ・ホテルの四階４０９号室で、開業医研究会に出席するため仙台から上京していた女医の小橋亜矢子、当時三十六歳が全裸で殺害されているのをホテルのボーイ田原正夫が発見しました。発見の正確な時間は午前八時三十五分です……」
村田部長は日誌を見ながら語り続け、他の三人の部長刑事は、死体発見当時の現場を思い出しているのか、申し合わせたように目を閉じてじっと聞いている。
部屋はシングルだったが、亜矢子はベッド脇の床にあお向けに倒れ、死体には衣類がかぶせてあり、首には太い帯状のもので絞めたあとがあった。
「もう少し詳しく説明しますと、両手両脚を拡げた大の字なりの死体にかぶせてあったのは、亜矢子がそれまでに身につけていたと思われる当時流行の冴えた空色のパンタロンが下腹部に、フリルのついた金茶色のブラウスが胸部に、パンティ・ストッキングが顔にかぶせてありましたが、部屋の中は格闘や争いのあともなく、ベッド

は使用した形跡はありません」

現場へ急行したのは捜査一課長以下村田、中原両部長刑事等の一課第五係と鑑識課長以下の鑑識課員、それに守田、木下両部長を中心とする、品川署の捜査係であった。

「検証の結果、部屋のドアにはシリンダー錠が取りつけてあり、自動的にロックされ、外からはキーなしでは入ることができぬことがハッキリしました。また窓の近くには非常階段などはなく、ベランダもついていません。つまり窓からの侵入は不可能です。ベージュのスーツケースとジャグルシーのハンドバッグはサイドテーブルの上にキチンと置いてありましたが、バッグの中の小銭入れはカラになっていました。しかし、指環や時計は奪われておりません。更に検屍の結果、頸骨が折れており、体内から精液が検出されましたが、パンティに失禁のあとがあり、鑑識では殺害してからパンティを剝ぎとって犯した屍姦であると推定しています」

その後の精液検査で、犯人は血液型Bの非分泌型の男と断定されている。

「解剖の結果、推定死亡時間は前夜——即ち七月二十八日、日曜日の夜八時半前後ということですが、これを裏付ける証言については、被害者の行動といっしょに説明します」

亜矢子は仙台の三陸女子医大で耳鼻咽喉科を専攻。卒業後は東京の明正医科大学付属病院でインターン。国家試験にも合格して仙台へ帰り、開業したのが三十二のときであった。鉄筋三階建ての小橋医院。銀行ローンで月月五十万円の返済だが、その支払いには少しも困らぬほど病院ははやっていた。

いかにも東北の女らしい色白の美貌。それが繁盛の原因だと地もとでは噂している。

「だが、亜矢子は独身じゃなかったんです。もと薬品会社のセールスマンだった久山好彦が、開業半年目から亜矢子の病院で働いていますが、実は同棲だったのです。久山がセールスで出入りしているうちに結ばれたのですが、両方がひとりっ子のために入籍はしていなかったのです。従って姓も変わらず、亜矢子の学友や明正医大病院の知人達は殆ど彼女が結婚していることを知らなかったといっています」

その亜矢子が一昨年の一月から毎月一度上京して研究会に出席するようになった。それは、同じ仙台で開業している耳鼻咽喉科医の安田伍郎と一緒であることがわか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

っている。
開業医研究会は各専門部門別に、新しい診療技術を開業医に指導する目的で、高輪の医薬センター・ビルで開催されたが、耳鼻咽喉科は毎月末の日曜と月曜の二日間と決まっていた。従って亜矢子は安田といっしょに土曜日の午後仙台を出て二日間受講し、月曜の夜仙台へ帰ることにしていた。
「列車はいつも一四時二〇分仙台発の特急ひばり9号。これは一八時一九分上野着です。そして旅館は一月以来ズーッと品川の臨海プラザ・ホテル……。七月も半月前から部屋を予約していたのですが、この月に限って、ちょっとした異変がありました。午後二時に仙台駅で安田医師と落ち合った亜矢子が突然、――だいじなことを忘れて来た。悪いがひとりで行ってくれ。一ト列車遅れて行く……といい残して駅を飛び出し、構内タクシーへ馳け込んだ……と安田医師はいってます。安田は座席指定をとっているので、予定通り特急ひばり9号で仙台を離れましたが、東京へ着き、ホテルへ入ると、フロントで、――小橋先生は、二時間前にチェックインされています……といわれて驚いたそうです」
結局、亜矢子は一五時五分仙台空港発の飛行機で東京へ向かい、一五時五五分に羽田に着いていることがわかった。安田より四十分余り遅く仙台を離れ、約二時間半早くホテルに入ったことになる。
「ところでホテルではですな、フロントでルームナンバーを聞いただけで、スーツケースをボーイに預け、自分はロビーへ行き、そこで待っていた中年の紳士とすぐ外出しています。この紳士は明正医大助教授の河瀬道広であることがわかりました」
「思うにだな――」
守田部長が口を出そうとするのを湯浅が押えた。
「終わりまで村チョウさんから事件の経過を聞こうじゃないか」
「じゃ、説明を続けます」
村田が言葉を続けた。
「亜矢子と河瀬助教授はホテルの前からタクシーで赤坂の高級レストラン、キャッスル・ラインへ行き、食事をして八時前にそこを出ると、またタクシーでまっすぐ湯島へ向かい、〝夢幻〟というホテルで午前一時近くまで二人だけの時間を過ごしています」
亜矢子が臨海プラザ・ホテルへ着いてからの行動は、事件後自発的に捜査本部へ出頭した河瀬の供述によるも

のであるが、キャッスル・ラインとホテル夢幻の従業員から裏付けがとれている。

「その夜、河瀬は亜矢子を臨海プラザまで送っていますが、ホテルに着いたのは午前一時半頃だったということです。一方、遅れて着いた仙台の安田医師は、午後八時頃亜矢子の部屋へ電話したが応答がなかったといっています」

従って二十七日の夜、安田は亜矢子に会っていない。翌二十八日の朝、研究会へ出席するためいっしょにホテルを出たが、その時亜矢子は、――横浜に嫁いでいる従姉を訪ねて帰りが遅くなった……といっているが、もちろん、これは嘘である。

「研究会の第一日が終わったのが午後五時……。安田は亜矢子を誘って新橋で食事をしたが、映画でも見ようと有楽町の方へ向かう途中、亜矢子は気分が悪くなったからといって、ひとりで車を拾いホテルへ戻った。ホテルでは八時頃フロントでキーを受けとった亜矢子を確認していますが、これが生きて人の前に出た亜矢子の最後の姿なのです」

安田はひとりで映画を見てから、有楽町のゲームセンターで十時半頃まで遊び、十一時過ぎてホテルへ帰って亜矢子の部屋へ行ってみると、ドアに――起こさないで下さい……の札がかかっていたので、そのまま自分の部屋へ戻って寝てしまった。

「そして二十九日の朝、安田医師は研究会の第二日に出席するため亜矢子の部屋へ行くと、まだ札が下がったままなので、急に気になった安田はボーイを呼び、マスターキーでドアをあけたとたん、全裸の亜矢子の死体が目の中へ飛び込んで来た……」

ボーイがたいへん落ち着いた男で、安田が部屋へ飛び込もうとするのを押え、すぐドアを閉めてフロントへ急報。部屋の中は係官が臨場するまで荒らされずに保存された。

「この間、騒ぎはホテルの中へ拡まりましたが、そんなときに、先ほど申した犯行――乃至は亜矢子の死亡時間に関する有力な証人が三人現われたのです。ひとりは408号のシングル部屋にいた金沢の老弁護士……。七十七歳で交通事故の賠償訴訟のために上京していたのですが、――いやっ！　いやっ！　やめてっ……という叫び声を壁越しに聞いています。男と女の痴話狂い……とは思ったが、商売柄、念のために時計を見ると、ちょうど、八時半だった。もう一ト組は410号のツインに泊まっ

ていた新婚さん。これも同じような叫び声を聞いているが、格別気にしなかった。確か八時半頃だった……といっています。これが事件発生までの状況です」

2

「おれも、大体同じようなことを牧村女史に話したよ」
「で、女史の反響はどうなんです？」
中原部長が湯浅にたずねた。
「反響の前に、こんどは捜査の状況を質問されたよ」
「捜査状況といっても一口じゃいえませんよ、二年近く調べてるんですからね」
「まず、被害者小橋亜矢子って女の性格をたずねられたよ」
村田部長が顔をあげた。
「それはあたしが中心になって洗いあげたんですがねエ……」
「記録によると、かなり特異な性格の女らしいなア」
「ええ。ああいうのを二つの顔を持った女とでもいうのですかねェ。学校じゃ優等生、一歩校門を出ると典型的な無軌道女子大生。仲のよかった同級生の話じゃ、セックス・フレンドを何人持ってたかわからないってンですよ。妊娠を心配して注意すると、――あたし達なんのために女子医大で勉強してるの……ってね。こいつア女子医大生の格言として語り伝えられてるそうですよ」
「そのセックス・フレンドにクロっぽいやつはいないんだな？」
「名前のわかった四人には当たってみましたが、Bの非分泌型血液はひとりだけ。その男にはアリバイありです。もうひとり亜矢子と半年以上同棲していたって男がわかりましたが、この男、可哀そうに亜矢子に捨てられてからグレて、アル中になり、車に撥ねられて死んじまったんです。これが医大時代……」
「卒業して、すぐ上京した？」
「ええ。明正医大の付属病院でインターン……。病院での評判はいいですなア。美人を鼻にかけず、人あたりがよく、研究熱心。国家試験にも優秀な成績で合格するほどの勉強家だったってね」
「しかし、助教授の河瀬との関係はインターン時代からだろう」
村田がうなずき返した。
「河瀬にいわせりゃ、亜矢子から誘惑された――将来、

博士論文を書くときの研究目標について指導してほしい……という口実で接近されたといっています。肉体的には若い亜矢子の方が積極的で、河瀬は持てあまし気味だったそうです。それが開業のため仙台へ帰って行ったのでホッとしていると、また一月から毎月上京して来るようになり、その都度電話で呼び出された」

「河瀬は本当に逃げ腰だったのかな？」

「口では、助教授とインターンの情事が表沙汰になっては、社会的にも家庭的にも追いつめられるから、止むなく呼び出しに応じていた……なんていってますがね」

「それが本当だとすると、殺しの動機になるなァ」

すると、若い木下部長が顔をあげた。

「いや。河瀬はシロです。血液型はＡＢですし、七月二十八日犯行の夜は、夕方から明正医大の助手や副手が河瀬の家へ集まり、四月の各科主任教授の選挙の際、耳鼻咽喉科の主任には奥村教授を推そうと、夜遅くまで相談をしています。つまり、河瀬は亜矢子殺しの夜、家から一歩も出ていないんです」

村田部長がうなずいた。

「河瀬自身そういっている。ただ、亜矢子殺しに関係があるようなことを新聞にでも書かれたら自分の将来は絶望的だ。それで、恥を忍んでコッソリとプライバシーをぶちまけに来たのだから、秘密を厳守してくれ……と泣きつかれた」

「そういう点、おれは腹が立つよ。抱っこして寝ンねした女が殺されたってエのに、男は自分のことしか考えねェ。４０８号室の弁護士だって、いやしくも法律の番人じゃねェか。商売柄、悲鳴を聞いた時間を確かめておくくらいなら、ちょいととなりの部屋のドアをノックすりゃアいいじゃねエか。もしかしたら、それだけで女一人の命が助かったかもしれねェ。４１０号室の新婚夫婦なんて、ひとの苦しみや悲しみなんか問題じゃなかったんだろう」

「話を続けますか？　亜矢子の性格……」

湯浅は、ちょっと照れたように苦笑いをした。

「済まん。牧村女史からも笑われたよ。話に主観が混じり過ぎる。もっと客観的に説明してくれってね。――続けて貰おうか……」

「仙台での亜矢子の評判は意外なほどいいんです。親切で、見立てがうまくって、気さくで、子どもを扱うのがうまいって」

「開業医としては打ってつけだ。おまけに美人で、一見

独身……。大人も子どもも耳鼻科は小橋病院へ……。はやるわけだ」
「その女医先生のスーツケースをあけてみて驚きましたねエ。テレビタレントが着るような華やかなドレスや金ピカのハイヒールが出て来た。またバッグからはメンバー制のホストクラブの会員証が三枚と、ダンスホールの回数券が一冊、全部東京のクラブやホールですよ」
「チョウさんがいう通り、亜矢子には仙台の顔と東京の顔があったわけだ。人目につきやすい仙台ではちぢめていた羽を、東京では思いっきり伸ばしたのだろう」
「明正医大耳鼻科の奥村宇四郎教授もいってましたよ。——博士論文のことでときどき研究室へ顔を出すが、どうも話の底が浅い。結局彼女は、開業医研究会を口実に、東京というネオン・ジャングルで女の本能を満足させていたのではないか……。どうやらこの言葉で尽きるようですなア、亜矢子の性格は……」
湯浅は守田、中原、木下の顔を眺めた。
「次はチョウさん達の番だ。話を聞こう」
「あたしは村チョウさんといっしょに仙台へ飛んだのですがね……」
守田部長が一番先に口を開いた。
「あー、さっき何かいいたそうだったなア。亜矢子が特急をよして飛行機にしたことで」
「あれはもういいんです」
「よかアねエよ。——思うにだな……と、一言ありそうだったじゃないか」
「いや……。自発的に本部へ出頭した河瀬助教授は、七月二十七日の午後三時ちょいと前に、亜矢子から——四時頃羽田に着くから、臨海プラザ・ホテルのロビーで待ち合わせてくれ……と電話がかかったといってます。また、——いつもは日曜日の夜会っていたのだが、あのときに限って、土曜日の呼び出しだった……ともいってます」
「その理由に関しては、捜査記録に何も書いてねエなア」
「亜矢子が急に河瀬に抱かれたくなり、矢も楯もたまらなくなって、文字通り東京へ飛んで来た……とも考えられるし、日曜日に他の男と会うことになったので、大急ぎで河瀬を土曜日に振り替えた……とも考えられます」
「状況としては後者だな。そしてそれが亜矢子の命とりになった」
「日曜日の男は誰だ……ってわけですね」
「そういうわけだ。内縁の夫、久山好彦は？」

「完全にシロですよ」
守田の言葉に、いっしょに仙台へ行った村田部長もうなずいた。
「日曜日の夕方から、自宅の近くのジャン荘で十時過ぎまでポンだチーだと牌をいじっているんです」
「それに久山はB型血液ですが、分泌型ですよ」
村田部長がそうつけ加えた。
「かくて二人、河瀬助教授と久山好彦が捜査線上から消えた。そこで仙台からいっしょに研究会に来ていた開業医の安田伍郎が浮かんで来た」
「亜矢子と別れて映画を見に行ったというが、アリバイ無し……」
中原部長が喋り始めた。
「映画館を出てゲームセンターで遊んだというが、これまたアリバイ無し……」
「ついてねエよなア、この男」
「血液型はBの非分泌型」
「やれやれ……、統計によれば、東日本にはB型が多く、西日本にはA型が多い」
「状況的には安田は非常に不利な立場に追い込まれましたが、たまたま彼が常備薬として持っていたスルファミン誘導体のドイツ製薬品BZ55を提示することによりシロと断定されました」
「それが老人性糖尿病の特効薬……」
「ええ……。安田は陰萎でやれないんです」
「糖尿病でシロくなった……なんて、洒落にもならねエなア」
村田部長が捜査日誌をポンと叩いた。
「あとは、この部厚い綴りが捜査本部の苦労を物語っています。三つのホストクラブの関係者、ダンスホールの教師やバンドマン、男の客、ホテルの従業員や宿泊客。それだけじゃありません。明正医大の亜矢子の知り合いや、開業医研究会の顔馴染みなど、亜矢子に接触する機会のある男性……。いままでに身辺捜査をした人数は六百十七人……」
湯浅が溜め息をついた。
「六百十七人ねエ……。二年にならねエんだから、大体一日に一人の割合で洗って来たわけか。このうちで完全にシロとなったのが六百六人……。保留が十一人だったな」
「それだってクロっぽいというわけじゃありませんよ」
村田部長が慎重な言葉でいった——。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor